

## 1935 年静岡地震の断層モデルの再検討

林 能成 (静岡大学防災総合センター)

小澤 邦雄 (静岡県地震防災センター)

Fault model of 1935 Shizuoka Earthquake deduced from seismicity and regional distribution of damages

Yoshinari Hayashi (CIREN, Shizuoka University)

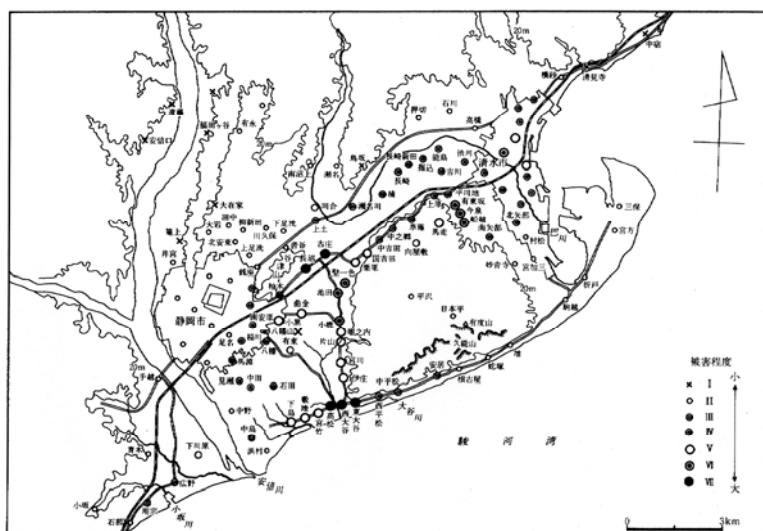
Kunio Ozawa (Shizuoka Prefectural Earthquake Preparedness Education Center)

1935 (昭和 10) 年 7 月 11 日に発生した「静岡地震」は静岡県中部の静岡市および清水市 (当時) の一部地域に死者 9 名、全壊家屋 360 戸あまりという被害をもたらした。この地震の規模はマグニチュード 6.4 とさほど大きなものではないが、1923 年関東大震災、1925 年但馬地震、1927 年北丹後地震、1930 年北伊豆地震、1933 年昭和三陸地震といった顕著な被害地震が続けて起こった直後に発生したこともあって、東京大学地震研究所や沼津測候所などによる迅速な被害調査が行われ多くの詳細な被害報告が残されている (金原・竹村, 1935、斎田, 1935、静岡県沼津測候所, 1935、など)。

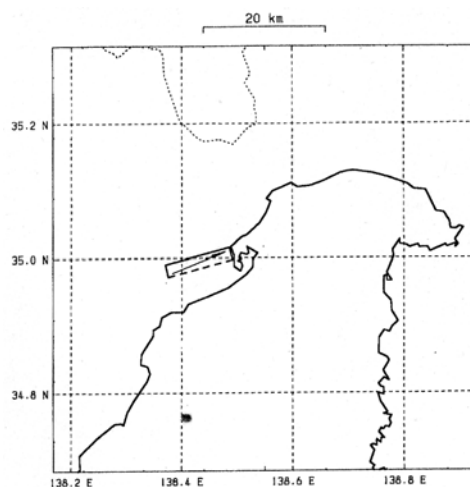
静岡地震による最大の被災地は日本平の南西側の海に面した高松、大谷地区で、家屋の全壊率は 20~30% に達している。次いで被害が多いのは、日本平の北西側に位置する国吉田、栗原、聖一色、池田といった集落で家屋の全壊率は 10% 程度である。2 つの地区は 4km 程度離れているが、中間の堀ノ内、片山、宮川では顕著な被害は見られない。一方、日本平の北東側にあたる有東坂、渋川といった集落でも比較的被害が大きく、さらに、そこから 3km 東に離れた清水港において岩壁の大破といった被害も見られた。(図 1 参照)

また、この時代には中央气象台による地震観測がすでに充実しており、多数の観測点データを使った P 波初動押し引き分布によるメカニズム解や、吉原・三島・御前崎といった震央距離 50km 以下の観測点における波形記録も残されている。武尾・他(1979)は、これらのデータを使ってこの地震の断層モデルを求めており、断層長さ 11km、幅 6km、すべり量 100cm、方位角 N75° E、傾斜角 70°、すべり角 20° というパラメータを得ている (図 2 参照)。このモデルでは、もっとも被害が大きかった高松、大谷地区が断層面から離れた場所に位置することになり、地盤条件にその原因を求めている。

本研究では、最近の微小地震観測データや地盤データなどを踏まえて断層モデルの再検討を行うとともに、高松、大谷地区で飛び地的な大被害が発生した原因を考察する。



静岡地震の集落別家屋被害程度 [ 金原・竹村, 1935 ]



武尾ほか(1979)による断層モデル  
[ 佐藤ほか, 1989 ]